その他

久留米大学産業経済研究所　公開シンポジウム

「人に優しいまちづくり～タウンモビリティ常設５周年をふりかえる～」（2）

久留米大学産業経済研究所

第二部

【講　演】　森　　正　直（久留米大学経済学部客員教授）

「文化経済学とまちづくり」

本学経済学部客員教授の森と申します。どうぞ宜しくお願いいたします。

本日の私の講演のタイトルは「文化経済学とまちづくり」と題しておりますが，この「まちづくり」ということについては，本日お集まりの皆様方の多くが恐らくタウンモビリティに深いご見識やご経験をお持ちの方々だろうと思います。その意味では，私は仕事の出発点がいわゆる文部官僚でございまして，日本の国全体の学校教育，学校外教育，幼稚園から大学院まで，あるいは研究機関までといった教育・学術・文化行政をやってきましたので，私の仕事・経験のベクトルはどちらかというと，マクロ的視点に立ってその次元で効果的な政策を議論し実施する。そんな仕事をしてきました。つまり相対的に言えば，今日お集まりの皆様方の多くは恐らく主として相対的にはミクロなお立場でいろんな事に取り組んでおられる。そして，どちらかというと，物事というのはちょっと生かじりで，右で聞いて左で何かをやろうという時には，マクロ的な物事の方が処理しやすいんで

すよね。ミクロの事柄となると，そうはいかない。それがミクロの恐ろしさで，マクロの簡単さというのは，一応の事を聞いたり，本屋で出来の良さそうな２～３冊の本を買ってきて読んでおいたりすれば，大抵もっともらしい事は言える。私はどちらかというとその部類ですから，その点をよく自覚していなければいけない，と思いながら年を取りました。ただまあ，本日の私の講演の「文化経済学とまちづくり」という演題を見ながら感じておりますのは，物事は確かに一般的にはミクロな具体的，実際的事柄の方が大変シビアで処理が難しいけれども，マクロな事柄，あるいは，イスラム教じゃないけど原理主義，原理原則というんですかね，そういうものも，常に全く下らないかというとそんなことはない。物事というのは時として，別々の主義・方針のミクロとミクロがぶつかりあうと，お互いに複雑・微妙にこじれ合って動きがとれなくなる場合があります。そんな場合に，一見ムダなように思えるけれども，一歩二歩お互いに退(しりぞ)いてマクロの立場，原理・原則的な立場に立つとか，その種の立場の第三者を入れると解決できることがあります。その様なケースも結構多いんですよね。国などの訴訟・調停制度というのも一種そういうものだと思います。別に本人が離婚しているわけでもなければ殺人をやったわけでもない。担当者はみな弁護士とか検事とか判事ですから。それはやはり，一種原理原則，マクロ，距離を置いて，ということが役に立つことがある。そんな意味で，私の話はかなり一般的・観念的ではありますが，何にもお役に立たないものでもなかろうと考えまして，こうして厚かましく本日お邪魔したわけでございます。

さて，こんな心づもりで話に入りますが，まずは何で「文化経済学とまちづくり」なのか。そもそも何でまず「文化経済学」なのかという事からお話させていただきます。

第二次大戦後の世界は，現在の世界と比較すると，大変色分けが簡単，クリアー

でした。つまり，戦争に勝った先進諸国と負けた先進３か国，それと戦争に勝った国々から植民地支配を受けていた後進諸国，そして国家独立を目指す諸地域というのがはっきりありました。その他，スペインとかギリシャとか中くらいの国々ですね，中進国。そういう色分けが大変クリアーにありまして，世界経済が大体その枠組みの中で，現在からすればマクロ的にはかなりスローに動いてきた。ところが，20世紀も後半になるにつれてそれが段々とややこしくなってきましたね。世界を大きく２分する冷戦構造が崩れて，徐々に形成されて来た別種の世界構造がそれで，従前の先進諸国に対する従前の後続諸国，後続諸国による猛烈な経済的追い上げ。ここで「経済的追い上げ」というのは，後発国の特徴は一言で言うと低コストですよね。給料が安いわけです，相対的に。それが大きな武器，競争力になる。そこをもっと詳しく言えば，この経済的な武器プラス極めて効率的な技術の追い上げ。つまり，テクノロジカルな進歩の速度は，先進諸国は大変苦労して巨額のお金と歳月と人的資本を投じて，技術開発，研究開発を進めますね。ところが，後からくるのは，ジェネリック，後発医薬品の利用と同様，真似をするのは簡単です。わが日本の先輩たちもそれをやってきた。それをやって，日清・日露戦争に勝ち，とそうやってきたわけですね，日本は，猿真似しながら。猿真似と言っても，頭は良いから巧(うま)いこと伸びて先進諸国の仲間入りをしてきたわけですが，それと同様な状況が，今や世界各地に広がっています。コスト的追い上げプラス技術的追い上げが大変激しい今の世界で，これからの日本はどうなるかといったら，我々日本人，日本の産業に残された道は，相対的に日本が得意な物作りの分野で高い付加価値を付けていく以外にはない。これは必ずしも値段の高い品物・サービスということではなく，500円の小物，おしぼりサービスのノウハウといった細かな「日本型」名品だって大切な生き残り商品という意味です。街づくりも同じこと。タウンモビリティだって広く世界に学びつつも，「日本型」名品も工夫できましょう。こういう時代に入り始めると，「文化」機能と「経済」

機能との賢い相互作用を考え、政策・事業提言を目指す「文化経済学」という未来志向型の学問が生きてくるのです。

さて，この高付加価値。つい最近アカデミー賞をとった『送りびと』は，イギリスからお見えの先生に対して通訳が難しいかもしれないけど，あのアカデミー賞作品の題名は“Departure”「旅立ち」なんだそうですね。それから，アカデミー賞をもう一つ貰ったのがアニメーション映画でした。「積み木の何とか」っていうあれね。積み木というと私達は直ぐ，往年の家庭崩壊の作品を思い出しますが，今回アカデミー賞を貰ったのは違いますね。アニメーション映画で大変雰囲気のある素晴らしい作品だそうです。これらはほんの一例でして，高性能の物作りに非常に役立つのは単に高度の科学技術ではタカが知れていて無個性的で，それプラス，繊細・絶妙・高品位の「日本型文化」の個性的ブランド，Made in Japan というものに，大いにわれわれ自身が自信を持ち，絶えず工夫しながらグローバルに通用するものにしていく。これが，わが高付加価値路線のこれからのイメージです。これは，そこにおいでの松尾先生はまた色々おっしゃるかもしれないけれども，そう異論はないと思うんですね，恐らく。まあ，そんな処が第１点目で，文化と経済の時代の文化経済学は，文化と経済との「プラスの結びつき」というのを大変原理的また実証的に追求する学問でして，私は学部や大学院の授業でも繰り返し言っているのですが，文化経済学というのは，今までは一般的にはピンと来なかった思想で，これから特に日本やイギリスその他，優れた高付加価値路線を行かざるを得ない国々，成熟化社会の国々でこそ，「文化経済学」という思考体系は非常に重要な学問になっていくに違いない，ということです。

私が今回ここにお招きいただいた時，「タウンモビリティ」というのは，実は遠からず私自身もその種々の恩恵に浴する可能性が高いのに，街なかでの一部の事例くらいは承知していたけど概念・体系としてはあまりピンと来なかった。それで，何も知らないで出掛けてはまた先生方に叱られるからイヤだと思って，パ

ソコンの「ウィキペディア」に「タウンモビリティ」と入力したら，出てきました。そこで私にピンと来たのは一つだけ。松尾匡（ただす)「タウンモビリティの経済学」かな。何か，そういうあれでした。その時に私が感じたのは，「あぁなるほど。松尾先生ならこういう視点で大変良いことを書かれるはずだ。ただ，もしも私が誰かと一緒に類似の本を書いたなら，私の立場は文化経済学だから，『タウンモビリティの文化経済学』のようになって，本の中身はまたあれこれ違ってくるだろう」ということでした。「タウンモビリティの文化経済学」となると，実際にいろいろ工夫し，ご苦労もなさっている皆様方がお書きになれば，大変立派なものをお書きになれる。と同時に，私みたいな一研究者の立場の人間が文化経済学の視点から書くと，それはまたそれで，それなりに長年のさまざまな体験・思索から，そこそこ若い人々やご専門の方々にも参考にしていただけるレベルのものが書けるだろう。奥行き・広がりを考えると，「タウンモビリティの文化経済学」とは，なかなか広く深いものになるのではないかと思いました。何だか間接的というか，斜（しゃ）に構えたような妙な発言になったような気もしますが，「文化経済学」というのは或る意味で21世紀から重要になっていく経済学の分野だといえる学問であると言えましょう。なお，ここで誤解をされては困る点があり，それは，いわば在来型といえる経済学と新興の文化経済学との関係でして，両者はちっとも対立的な関係にはないというのが我々の認識です。そうではなく，お互いがお互いを深め合う。お互いにそれぞれの視点・立場から物事をもっと深く考え把握する契機・縁（よすが）となり，それぞれを更に深める参考となる。そういう関係にあると考えているのです。

そこで２点目。「成熟社会を深化させる「文化」」という考え方について少し触れておきたい。昨2008年，アメリカのサブプライム・ローン問題をキッカケに，普通の人々の目には見えていなかった，隠されていた異常なハイリスク金融資本

主義の病巣が，欧米で一気に崩れ，世界経済全体が大変な同時不況に引き込まれました。あの時期に，与謝野馨大臣（当時）はテレビとかで，「日本はサブプライムなんて傷が浅い。蜂が刺したようなものだ」とおっしゃった。ところがその蜂が，彼が見込んだミツバチなんかじゃなく熊ん蜂だったものだから，日本経済もひどい半身不随になってしまった。つまり，日本経済は成る程サブプライム・ローンというか先端的金融工学のリスクパターンからは遠かったかもしれないが，実体経済という重要な面において圧倒的に外需依存型，輸出依存型の経済だから，その方からのダメージが大きかった。消費大国アメリカのみならず頼りの海外市場の景気が落ち込んだから，日本の産業，経済，それにつれて家計の方までダメになっちゃったということですね。この無残な成り行きの中で，輸出産業の一層の高度化，更に並んで成熟化社会たる日本の内需構造への一層の適応を効果的に進めていくには，これから「文化」という国の根源的諸価値そのものの更なる活用が不可欠であり，かつまた，それらの「文化」の機能が日本社会の成熟化を一層深めていくという意味で，二重に役立つ，大切な事柄だと申し上げたいのです。

話がどうも抽象的で，お聞きの側ではピンと来ないだろうとも思いますので少し具体的な例を挙げて解説を続けますと，私の手許の古い数値で恐縮ですが，日本観光協会「数字でみる観光2004」によれば，一人当たり国民所得（2001年度）がアメリカ３万１千ドル，日本２万４千ドル，イギリス２万１千ドル，ドイツ１万９千ドルで，先進諸国の所得状況をこの程度として，同時に各国の年間労働日数（2000年度前後）を比較すると，アメリカ238日，日本237日，イギリス229日，ドイツ222日となっており，これらを念頭に置きながら，一種の比較的高価な「文化系商品」と言える「海外旅行」の購入状態，つまり各国の人口に占める海外旅行者数の割合を朝日新聞社「Japan Almanac 2005」で見ますと，アメリカ23.3%，日本13.1%，イギリス97.1%，ドイツ95.5%となっております。

つまり，眺めたデータは少ないのですが，恐らく，日本人やアメリカ人の多く

はカネを比較的持っていながら忙しく働き続けるイソップ物語の蟻んこ型文化に染まっており，彼らより所得が豊かとは恐らく言えないイギリス人やドイツ人の多くは経済的志向もあるにせよ相対的に楽しみ志向が強い，キリギリス型文化を良しとしている。このような観察で恐らく間違っていないのではないでしょうか。私が，成熟化社会における「文化」の重要性を述べた訳は例えばこのような，成熟化社会での文化レベルと，種々の「文化系商品」への有効需要との相関関係を見逃しては良くないという発想があったからです。

また例えば，これは２月末の日経新聞に出ていた小さな記事です。「東京都目黒区在住の６人の高校生が，雑誌作りの経験者や同区職員らの助言を得ながら，同区の費用補助により，若者の視点で目黒の魅力や地域の活動，身近な環境問題などを伝えるタウン情報誌「めぐろう」を年１回，５千部発行し，区内の諸学校に配布する。同様の事例は2001年に杉並区でも見られる」と報道していましたが，私どもが中学生・高校生の頃にこんな具合に学校の外にまで広く目を向けて生徒らが文化的活動を実践するような事は，各学校恒例の学園祭・文化祭以外には，思い付くキッカケすらありませんでした。こんな小さな新聞記事でも，我々の日常的な社会の成熟化に思いを至らせる事実を伝えていると感じました。

三つ目に，「文化経済学」という思想の中で私が非常に大切だと思っている「二つの価値基準」の協力・調和と対立・衝突という現象の重要性について簡単に説明させていただきたいと存じます。

先ほど私は「原理主義」というような事を文化経済学に関して申しましたが，文化経済学の視点から，実社会の様々な経済的・社会的成功例や失敗例，課題・紛争を考察してみると，そこにはほとんどの場合，私がこれから簡単に説明する二つの価値基準，つまりは「経済価値基準」と「文化価値基準」の共存・調和の状態か，その逆の対立・闘争の状態が見られます。国内であれ外国であれ，国政

レベルであれ地方レベルであれ，県レベルであれ市町村レベルであれ，都心部であれ山間地であれ，現代の都市開発とか経済政策・環境対策とかはほとんどの場合，経済的利益を強く重視し，それにとどまらず出来れば環境的利益・社会的利益も増大したいという構造を持っています。つまり，これらは私が言うところの「経済価値基準」に属する政策要素と「文化価値基準」に属する政策要素とを同時に抱えている訳で，それ故に，個々の実際の事例において非常に頻繁にこれら両価値観の衝突とか調和とかが見られるのです。もちろんたいていの利害関係者にとって，望ましいのは，両者の調和・共存であって，衝突・闘争ではありません。

この話題もかなり抽象的，原理的レベルの事柄なので，やはり実際の分かり易い例で申しますと，たいていの方々が昨今よくテレビ・新聞などでご存知の通り，衆議院の小選挙区がここ久留米地方の筈の鳩山邦夫総務大臣（当時）が，西川日本郵政社長（当時）サイドの計画による東京駅前の「東京中央郵便局」という４階ないし５階建て位の超特等地の低層建物を2011年までに地上38階建ての超高層ビルに建て替え，郵政事業とともに賃貸事業も行い年間百億円超のテナント収入を得るという構想に対して，鳩山大臣は，1931年完成のこの低層建築物は昭和初期を代表するもので「重要文化財の価値がある。それを米国流の利益追求主義で壊すのは国辱もので，トキを焼き鳥にして食べるような暴挙」と強く非難して対立しました。また，低層地区に大容量の超高層マンションを計画して地元住民の日照権・眺望権・景観権保護の立場と衝突する例なども種々の大都市圏では日常茶飯事です。本日はこれ以上お話を続けませんが，あれもこれも，私が大切な事柄と申しました文化経済学で重要な視点とする文化価値基準と経済価値基準の対立・調和の事例です。このような現象について，皆様は皆様のお仕事・ご経験の面から，原理的・本質的に色々お考え下さればと存じます。

タウンモビリティ関連のお集まりだという事で，私といたしましては立場上，文化経済学のＰＲがてら，タウンモビリティを含む「街づくり」と，或る意味で原理的な面もある文化経済学との結構深そうな関係について，皆様のご関心をお寄せいただければと考え，貴重なお時間を頂戴いたしました。ご清聴いただき，どうも有難うございました。